

別紙

福祉サービス第三者評価の結果

1 評価機関

名称： コスモプランニング有限会社	所在地： 長野市松岡1丁目35番5号
評価実施期間： 令和元年6月11日から令和元年11月11日まで	
評価調査者（評価調査者養成研修修了者番号を記載） 050222、050482	

2 福祉サービス事業者情報（令和元年10月現在）

事業所名： (施設名) 長野市なかじょう保育園	種別： 認定こども園(保育所型)
代表者氏名： (管理者氏名) 市長 加藤 久雄 保育・幼稚園課次長 広田 貴代美	定員(利用人数)： 72名(25名)
設置主体： 長野市 経営主体： 長野市	開設(指定)年月日： 平成26年4月1日
所在地：〒381-3203 長野県長野市中条2770番地	
電話番号： 026-268-3529	FAX番号： 026-268-3530
ホームページアドレス： http://www.city.nagano.nagano.jp/	
職員数	常勤職員： 7名 非常勤職員： 7名
専門職員	(専門職の名称) 名
	・園長 1名
	・保育主任 2名
	・保育士 9名
施設・設備 の概要	(設備等)
	(屋外遊具)
・乳児室 … 1室 ・保育室 … 2室 ・遊戯室 … 1室 ・調理室 … 1室 ・事務室 … 1室 ・便所 … 1室 ・相談室 … 1室 ・沐浴室 … 1室	
・ブランコ ・鉄棒 ・雲梯	

3 理念・基本方針

○長野市保育理念(保育所型認定子ども園を含む)

子どもの健やかな心身の発達を図り、望ましい未来を作り出す力の基礎を培う。

○児童福祉法に基づき、保育を必要とする子どもを保育することを目的とする。

○子どもの最善の利益を考慮し、その福祉を積極的に増進する。

○長野市保育基本方針

- 安全で安心できる生活の場を整え、子どもが自己を十分に発揮できるようにします。
- 専門の資格を持った職員が養護と教育を一体的に行い、子どもの発達を援助します。
- 保護者の気持ちを受け止め、共に子育てをします。
- 家庭と連携を図りながら、子育ての悩みや相談に応じ助言するなど、地域における子育て支援の拠点として、社会的役割を果たします。
- 保育を実践するにあたっては、「全体的な計画」に基づき、一貫性を持って子どもの実態に応じた柔軟な保育を展開します。

○なかじょう保育園保育目標

- なかよしの子ども（友達と元気に遊ぶ「ありがとう」の気持ちを持ち、自分やまわりのひとを大切にしよう）
- かんがえる子ども（身近な環境の中で工夫したり考えたりして遊ぶ）
- じょうぶな子ども（健康な生活リズムを身につけよう 思い切り体を動かそう おいしくご飯を食べよう）

4 福祉サービス事業者の特徴的な取り組み

なかじょう保育園は長野市が直接運営する28保育園(内休園1園)と2認定こども園のうちの一つで、昭和58年4月に当時の中条村の村立幼稚園として開設され、平成22年1月中条村が長野市に合併したことに伴い、現在、長野市の認定こども園として運営されている。

当保育園の前身は昭和57まで旧中条村内で運営されていた3ヶ所の認可保育所に遡ることができ、昭和58年4月1日中条村立中条幼稚園として92名の園児数で開園した。平成21年2月に村として認可保育所設置の届け出をし承認され、同3月には保育所型認定こども園設置認可申請をし認可され、同時に中条村立幼稚園の廃止認可申請も受理され、平成21年4月1日、中条村立認定こども園として保育園機能と幼稚園機能を持つ「なかじょう保育園」として新たに開園した。その後、平成22年1月、中条村と長野市の合併により長野市認定こども園なかじょう保育園となり、平成26年4月には更新の時期となり保育所型認定こども園として再認可を受け、幼稚園と保育園の機能の特長を合わせ持ち、教育と保育を一体的に提供できる保育所として現在に到っている。

中条地区は、長野県の北部に位置し、国内外からの観光客が数多く訪れる志賀高原と北アルプス・白馬方面を結ぶ主要地方道が通過する地区内は、北信濃の観光をはじめ多方面にわたる情報発信地域として重要な位置を占めている。東は長野市街地、北は長野市戸隠・鬼無里地区、西は小川村、南は長野市信州新町地区に接している。村の北部には信州百名山の一つで、昭和53年長野国体の山岳競技会場ともなった標高1,378mの、山姥伝説のある虫倉山が聳え立ち、春から夏にかけて多くの登山者を迎えている。虫倉の山裾は南北に伸び、地区のほとんどは15度から40度近い起伏に富んだ傾斜地で、集落はその中のわずかな平地地を利用して点在しており、その周辺には棚田が数多く見られ、ふるさとの景観を情緒豊かに映し出している。また、地区の年間の平均気温は19.7℃で、降水量が900mm前後と、山間地特有のさわやかな気候となっている。盛夏の気温は、最高で8月には30℃～36℃となるが、北アルプス連邦を越えての清涼な風の影響もあり湿度が低くしのぎやすい。一方、2月の厳冬期には-10℃～-15℃と厳しい気候となり、村北部の標高800m前後の地域では降雪量も多く数十cmほどの積雪となることもある。更に、周囲が山脈にかこまれているなどのことから、台風が通りにくい地形となっており、6月の梅雨や、夏から秋にかけての集中豪雨は近年増えつつあるものの比較的少なく、土砂崩落等による大災害の発生原因となるこれらの影響を受けにくい気候となっている。

子ども達は中条地区のすめらぎ、中条平、五十里などの11区から通っており、地区の75歳以上の高齢化率が33.8%、年少人口(0～14歳)の比率が5.9%(いずれも令和元年10月現在)と少子高齢化が進んでいる中、長野市街地に通勤する若い世代も多く、祖父母が近くに住みながらも核家族として一戸建てに住む世帯が比較的多いという。地域の人々の当保育園への関心は高く、中条地区の伝統として「中条保小中連携型一貫教育プロジェクト」が実践されており、「地域が学校である」という体制づくりを推進しており、保育園・小学校・中学校が連携して一貫した教育に取り組んでいる。そうした背景もあり、園舎は小学校に併設となっており、その南校舎1階を使用し、また、園庭の

一段下がった続きには小学校の校庭があり、「長野市乳幼児期の教育・保育の指針」の基本方針Ⅱ「育ちをつなぐ」の「幼・保・小の連携」の中の「小学校との連携の充実」に沿い、幼児組の子どもたちは小学校の音楽会などに招かれ、また、自由に見学をするなど、当保育園の先輩でもある小学生たちとも日常的に様々なふれあいの時間を持っている。

こうした中、当保育園は今年度9月に信州やまほいくの普及型認定を受け、信州百名山の虫倉山の麓に位置するという地の利を生かし、自然の宝庫にある動植物に親しみ、天候に関係なくほぼ毎日園外に出かけ、周囲の自然や人に関わると共に自然の中で足腰を鍛え、様々な自然体験を通じて感動し、自分が楽しむ方法を主体的に見つけ、その経験や学びを知らず知らずのうちに“人生の根っこ”づくりへと繋げている。

現在、当園には0歳児・1歳児・2歳児のたんぽぽ組、3歳児・4歳児・5歳児のどんぐり組の二つのクラスがあり、更に3歳児・4歳児・5歳児はそれぞれ同年齢の活動をする際にはもも組・うめ組・さくら組として分かれている。当保育園として、それぞれの子どもの発達段階に合わせて作成された2019年度の「全体的な計画(保育課程)」の下、職員は「同年齢や異年齢の友達との関わり、小中学校、地域との関わりなど連携し保育します」「保護者の気持ちを受け止めて、保護者と共に子育てします」等、日常の生活の中で子ども同士で遊ぶ機会が少なくなっている現代、職員が子ども達と同じ目線で活動することで良き理解者として子ども達から信頼を得られるようにじっくりと時間を掛けて子どもの育ちを待ち、同時に、そのためのいわば土壌を整え豊かにし、園での生活の安定を図っている。また、その基盤を更に強化すべく、職員は、園内外の研修などで保育の専門性を高めつつ、小規模園という特長を生かし職員間の意思統一を図っている。

当保育園では認定こども園として保育内容を保育園機能の3歳児未満児、保育園機能の3歳児以上児、幼稚園機能の3つに分けており、保護者の就労の有無と幼稚園の降園時間が15:00とすることのほかはほぼ同じ日課としている。当園では保護者のニーズに合わせた様々なサービスを提供しており、仕事と子育ての両立等を応援するための時間外保育や一時預かり、障がい児保育、おひさま広場等を実施している。時間外保育は短時間保育利用者が時間外保育を必要とする際に利用するサービスで、標準時間保育と合わせると三分の一近くの子ども達が利用している。一時預かりについても保護者の就労・保護者の疾病・保護者の育児に伴う心理的、肉体的負担の解消等による預かり保育を行うサービスで、希望に応じ子どもを受け入れることができる。障がい児保育は保育を必要とする心身に障害を持つ子どもの保育を行うサービスで園児との遊びや給食を通して子ども同士の交流を行い心身の発達を促すという内容で当園でも受け入れが可能となっている。更に、おひさま広場では未就園児と保護者対象に園開放と子育て相談も行っている。

当園では「長野市乳幼児期の教育・保育の指針」の目標「かがやく笑顔で 元気に遊ぶ しなのキッズ」及び「子ども・子育て支援事業計画 ～わくわく子育て すくすく子ども～」に沿いビジョンを明確にしており、今年度2019年度から2021年度までの中期計画として、2019年度に長野県自然型保育(信州やまほいく)の認定を受ける(今年度9月、既に認定済み)こと、長野市運動プログラムの充実を図ることや運動と遊びのプログラムの活用で運動機能の育成を図ることなどを掲げ積極的に取り組んでいる。また、職員は、当園の事業計画のうちの重点課題、「保育内容の充実」として「自然を生かした保育を行う」「地域資源と人材を生かした保育を行うこと」「異年齢保育の充実させる」「小学校との連携の推進」などを掲げ、職員一人ひとりが個々の得意な分野を活かし合い、子ども達の豊かな活動につなげつつ、職員同士で日常的に子どもたちの様子や異年齢での活動の様子を情報交換し、何でも話しやすい雰囲気をつくっている。更に、園内外研修で得た学びを職員間で伝達し合い、共に子ども達の姿の読み取りや環境の構成を考え、具体的な関わり方をお互いにアドバイスすることでサポートし合い、園全体で実践の振り返りと改善に努めている。

5 第三者評価の受審状況

受審回数（前回の受審時期）	今回が初めて
---------------	--------

6 評価結果総評（利用者調査結果を含む。）

◇特に良いと思う点

1) 豊かな自然環境を活かした保育

当保育園は今年度9月に信州やまほいく（信州型自然保育）の普及型認定を受け、虫倉山の麓に位置するという好立地を生かし、園周辺の自然や動植物に親しみ、その中から自由に色々なことを試し、考え、学び、お互いに教え合っている。

「長野市乳幼児期の教育・保育の指針」の基本方針Iで『育ちを豊かにする』教育活動の推進と掲げ、その1の「自然環境を活かした体験活動の充実」として「命の大切さ、ものの美しさに気付く豊かな感性を育む」とし、また、「見て、触れてなど、全身の感覚を使って体験ができる環境を整える」としており、当保育園はそれらを実践し、信州やまほいくの到達点でもある「自分を支える“自己肯定感”」を高めようと職員が懸命に取り組んでいる。

当保育園では昨年度信州やまほいくの認定を目指し、公開保育を実施しており、そのテーマを「人と関わる力を育む保育環境づくり～ごっこ遊びを通して」とし、また、長野市公立保育園で毎年度1園1テーマで実施されている「レポート研究」についても今年度「自然や人とのつながり」をテーマとして、自然保育に力を入れ職員が協働している。園舎西側には「どんぐり山」や「清水沢」があり、そのどんぐり山で枯れた葉の上を滑ったり、雪遊びなどをし、清水沢では沢ガニなどを一時的に捕まえ観察している。また、「なかじょう探検」と称して、宮遺跡、土尻川方面、月夜棚方面、金魚池、中条会館、道の駅“中条”、長野西中条高校、マレットゴルフ場などにも足を延ばしている。

当保育園の主な散歩コースは二つあり、その一つとして金魚池（防火貯水槽）、オタマジャクシの池、ライブリーなかじょう公園のコースがあり、その二として中条高、中学校、グラウンド、中条農産物加工場、公民館、中条歴史資料館のコースがある。当保育園では天候に関係なくほぼ毎日園外に出かけ、周囲の自然や人に関わると共に自然の中で体を鍛えており、自分が楽しむ方法を主体的に見つけ、その経験や学びを知らず知らずのうちに人生の基盤づくりへと繋げている。当保育園の週日案、月案等で信州やまほいくの実践や柳沢運動プログラム、長野市運動プログラムなどを取り入れ、巻物風にイラストで分かり易く示した「やまんば伝説」として「やまんば」をキャラクターにし、チャレンジタイムの運動時に「①竹馬②鉄棒③雲梯④縄跳び⑤泥だんごづくり」などに挑戦している。

更に、子どもたちは散歩コースで収穫した栗のイガ、松かさ、枳の実、枯れ葉などを園に持ち帰り廊下に展示したり、リースなどを作っている。園の畑やプランターでは野菜も栽培しており、枝豆、大根、ピーナッツ、オクラ、キュウリ、ナス、トウモロコシ、ジャガイモ、サツマイモなどを職員とともに育て、その生長を観察し、収穫したものを給食食材として使用するなど、「食」の大切さも学んでいる。生き物の飼育については「やまんば伝説」の「⑤小さな虫も友だち」とし、散歩コースで捕まえたバッタ、コオロギ、トンボなどについてはその場で観察するのみとし、リリースすることにより命の大切さに気づくようにしている。

当保育園では身近な環境と十分に関わる中で美しいもの、優れたもの、心を動かす出来事などに出会い、そこから得た感動を他の子どもや保育士等と共有し、様々に表現することなどを通して豊かな感性を育てている。また、自然の大きさ、美しさ、不思議さなどに直接触れる体験を通して、子どもの心が安らぎ、豊かな感情、好奇心、思考力、表現力の基礎が培われるように工夫している。

2) 継続性と連続性に配慮した保小中一貫教育

当保育園は保育所型認定こども園として保育と教育を一体的に提供できる保育所として機能している。当保育園は中条村立中条幼稚園として27年間運営してきたということもあり地域の人々の子ども達への養育についての熱心さを窺い知ることができる。

長野市中条地区には保育園、小学校、中学校が一つしかないというその良さを生かし、学校・家庭・地域が連携して生きる力を身につけた子どもの育成をめざし、保・小・中の連携と接続を基調とした「中条保小中一貫型教育プロジェクト構想」があり、連携型の一貫教育を展開している。国の方針としても、地域・学校が一体となって地域に根ざした教育を行う方向が打ち出されており、また、第二次長野市教育振興基本計画の学校分野における実施計画としての「第二期しなのきプラン」にも、長野市教育の基本理念である「明日を拓く深く豊かな人間性の実現」に向け、教職員の力量の向上を教育活動の基盤と考え、学校、地域、家庭、事業所等の更なる連携の中で、「知・徳・体」をバランスよく伸ばし、子どもたちに「生きる力」を育むための支援を行っていくとしている。

こうした中、中条地区では保小中合同集会在年3回ひらかれ、今年度もすでに保小中歓迎会、小学校運動会、小学校6年生中学校体験なども実施され、また、教職員にも六つのプロジェクト(教科研修、中1ギャップ解除、行事・児童会・生徒会交流、ふるさと学習、健やかな心と体、保小・保中連携)などがあり、学習や指導の継続性と連続性が図られている。当保育園と小学校は同じ敷地内にあり、小学校の南校舎の1階に当保育園があることから、園の子ども達と小学生との交流が頻繁に行われており、10月には小学校のパソコン室に保育園年長の子ども達が出向き、5年生と一緒に「プログラミング」を体験している。「中条保小中一貫型教育プロジェクト構想」の「保小連携プロジェクト」として今年度のテーマを「異年齢のともだちと接することで、遊びや活動の場を広げながら色々な考え方や価値観を共有し相手の意識を持って行動できる子ども」とし、「生活科、体育科、音楽科の授業を通じた交流」「可能な行事を通じた交流」などが研究内容としてとり上げられ、既に4月は春探し、5月こいのぼり交流、9月音楽交流、10月ハロウィン(年長児と5年生が仮装して中学校へ)として実施され、2月には体験交流などを計画している。

長野市に合併する前、平成21年3月、当時の中条村教育委員会としてグローバル化が進む知識基盤社会の時代に、将来この地域を担っていく子ども達への想いは、知(豊かな知識)、徳(豊かな心)、体(健やかな体)の三拍子が調和よく備わり、この「郷土を愛する」子どもの姿を描き願って「中条村の子ども像」を制定しており、地域の自然、伝統、文化、生活を育んできた郷土を愛し、誇りに思い、地域の一員として生まれ育ったこの地域に貢献する主体性が備わった子どもを育成しようとしており、現在の「第二期しなのきプラン」にも通じている。

当保育園では当園での保育が、小学校以降の生活や学習の基盤の育成につながることに配慮し、幼児期にふさわしい生活を通じて、創造的な思考や主体的な生活態度などの基礎を培うようしており、当園において育まれた資質・能力を踏まえ、小学校教育が円滑に行われるよう、小学校との意見交換や合同の研究の機会などを設け、保育所保育指針に示された「幼児期の終わりまでに育って欲しい姿」を共有するなど連携を図り、保育園と小学校との円滑な接続を図っている。

3) 地域の人々との交流

「長野市乳幼児期の教育・保育の指針」の基本方針Ⅳで『育ちを支える』家庭・地域との連携」と掲げ、その2の「地域交流活動の充実」として「地域住民が教育・保育活動に参加することで、地域とともに子育て支援を行う教育・保育施設を目指す」「豊かで特色のある様々な地域資源を十分に活用し、『社会力』の基礎育成に取り組む」などの目指す内容も示しており、当保育園ではそれらを実践している。

当保育園では事業計画の「世代間交流」や全体的な計画の「地域との連携」として文書化しており、地区内のかがやき広場の利用者、オレンジカフェの利用者、野菜の栽培に指導に訪れる住民自治協議会の高齢者、同じ敷地内の小学校児童、職場体験も含めた中学校生徒、ボランティア、また、おひさま広場に来る親子、散歩道で出会う地域の人々、参観に訪れる祖父母など、様々な人々とふれあうことができるようにしている。

特に「世代間交流」ということで地区の生きがづくり講座「かがやき広場」へ訪問したり、散歩コースにあるオレンジカフェ(認知症やご家族、地域の誰もが気軽に集える場所)などを訪れ、歌、ダンス、手遊びなどを披露する機会が持たれている。また、地区運動会、公民館で行われる中条地区ふれあいクリスマスの集い・お正月遊びなどにも幼児を中心として参加し、子どもたちは幅広く地域の人々とふれあう中で、人との様々な関わり方に気づき、相手の気持ちを考えて関わり、自分が役に立つ喜びを感じている。

保育園には市町村の支援を得て、地域の関係機関等との積極的な連携及び協働を図るとともに、子育て支援に関する地域の人材と積極的に連携を図るよう努めることが求められている。当保育園では過疎化が進み園児数も減少傾向にあるという地域の実状を踏まえ、子ども達の生活に関係の深い高齢者をはじめとした地域の人々などとふれあい、自分の感情や意志を表現しながら共に楽しみ、共感し合う体験を通して、これらの人々などに親しみをもち、人と関わることの楽しさや人の役に立つ喜びを体験している。また、日々の生活を通して親や祖父母などの家族の愛情に気づき、家族を大切にしようとする気持ちが育つようにしている。

4) 連帯感のあるポジティブ発想の職場風土

現在、当園には0歳児・1歳児・2歳児と3歳児・4歳児・5歳児混合の2クラスがあり、25名の子どもが通っており、日中の職員は園長も含め6名(給食調理員除く)と、子どもの数、職員数共に

少人数で、小規模園の保育の特徴を生かし、チームとして職員全員で全ての子どもを育むように未満児、以上児一人ひとりの子どもの保育を振り返り、発達の状況を共有し成長を見守っており、園長、主任、職員間の双方向のコミュニケーションが取れている。

中山間地という立地面から、朝夕パート保育士、代替保育士、休憩パート保育士等の確保や人のやり繰りは難しい面もあるが、保育士としての経験が豊富な、保育に熱意のある職員が多いことから園・クラス・職員としての“共通の目的”を理解し、現状を知ること、目指す先を共有することで連帯感が生まれている。保育士としての共通のねがいや保育の根っこは変わらず、当保育園の提供する保育の中で、「どんな子どもに育てほしいか?」「子どもがどんな思いを持っているか?」など、同じ事務室に机を並べ、会議とは別に、子どもへの思いをフリーに語り合う時間を大切に、担任・非担任にかかわらずクラスの垣根を超えた園児への対応、保育への支援体制が出来上がっており、園児や保護者、周囲の人々に対し十分に気遣いのできる体制が整えられている。

職員は一人ひとり、得意の分野を発揮しており、山姥という中条地区伝説のキャラクターを使った運動遊び、信州型自然型保育(信州やまほいく)での野外活動、運動会ごっこなどで、場を和ませたり、笑いを取ったりして、こどもたちに寄り添う・温かい支援をしており、ある意味、職員自らが、「教えてあげる役割」「ちょっとかなわない相手としてのガキ大将の役割」「同じ目線の友達のような役割」「これやってもらえないかな? とお願いするような、ちょっと下手に出る役割」を演じ、四つを場面ごとに使い分けをしている。運動会ごっこの綱引きでも幼児全員の子どもチームとおひさま広場参加の大人・職員の大人チームが綱引きをし、本気で2戦勝負する中で、子どもチームが2戦とも負け、本気でくやしがる子どもの姿が見られた。子どもにとって、そういう相手に負けるのと、勝たしてくれる相手に負けることでは、心に残るものが違うと思われ、職員も保育を楽しみつつ、日々、感動を得ている。

「長野市乳幼児期の教育・保育の指針」の基本方針Ⅰで『育ちを豊かにする』教育活動の推進と掲げ、その3の「人との関わりと表現力を養う活動の充実」では「…、人には違いがあり、違っていいと理解する心の育成」と目指す内容を示しており、当保育園では「ちがいを面白がる」「ちがいがあるから、幅が広がる」「そこから何ができるかを出し合う」という過程を大切にしている。

「先入観より、好奇心」「今日より明日をよくしよう」という物事をポジティブな側面からとらえることで、子ども達の思いを受け止め豊かな成長へと繋げている。

◇改善する必要があると思う点

1)安全を確保するための更なる取り組み

当保育園では年2回の総合的な消火訓練と年1回の通報訓練を実施しており、年間12回の避難訓練計画も独自に立て、毎月、災害の想定を変えた訓練を実施している。また、土砂災害や救急法についても職場内研修として実施し、職員間の意思統一と意識の高揚を図っている。今秋の台風19号の際には、敷地の隣にある清水沢の水位を園長中心に職員が絶えず視認し、その氾濫の危険度を把握していたという。更に、災害時に子どもの安全を確保するため、特に併設の小学校、避難先の中学校、市支所、駐在所、消防署、保護者等、関係者に協力いただきながら必要な対策を講じている。

当保育園が併設されている小学校の地区は土砂災害のレッドゾーンとなっており、当保育園でもそれを意識し、「土砂災害」想定で5月と10月に避難訓練を実施し、それぞれ、クラス保育中、自由遊び中に行うことで現実的な訓練となっている。また、小学校と一緒に避難訓練も年2回組み込み、お互いの連携を取れるようにしている。長野市の公立保育園・認定こども園としての「危機管理マニュアル」があり、各種災害対応を周知徹底しており、避難場所の中条中学校への避難経路図を事務室に掲示し万が一に備えている。当保育園の消防計画書や土砂災害訓練計画を消防署に毎年度提出し、そのほか、6月と2月には不審者対応訓練、7月には軽度の地震想定等の訓練も実施している。また、災害時の引き渡し訓練や連絡網を使った安否確認も組み込み万全を期し、事務室入り口には非常持ち出し品のリュックを備え、主任が定期的に入れ替え、補充・整備をしている。

今後、不測の事態に備え、更に、必要な対応を取られることが望まれ、市としてのマニュアルに、当保育園として想定されるリスクについての対策も加え、当保育園独自のマニュアルを再整備され、幾つかシュミレーションを通して訓練することで有事の際の実践に繋がれることを期待した

い。

2) 保護者とのコミュニケーションの更なる充実

市としての「意見(要望)への対応マニュアル」があり、マニュアルについてはブロック園長会で各保育園の現状と課題として提案し、園長リーダー会で見直しを検討している。また、保護者に向けては、年2回の保護者アンケートや春1回と必要に応じて開催する個別懇談会、クラス懇談会、年2回の保護者総会、随時開催の保護者役員会等で意見・要望を集約している。保護者総会や役員会には園長が参加をし、懇談会には各担任が出席している。また、普段、保護者に伝えきれない園での生活を感じていただくために「保育体験」などの取組も行っている。更に、園だよりに「いつでも相談してください」と掲載し、送迎時に担任から保護者へ子どもの様子を伝えたりして、要望を聞いている。

当保育園では「苦情解決の仕組み」も掲示し、意見箱も設置し、全家庭に配布をしている「入園説明会資料」や「4月の園だより」でその主旨を周知している。送迎時、保育室前の昇降口に主任が立ち、また、クラス担任が引き渡し時に子ども達の日々の様子の伝達や情報収集、保育の意図の説明などを行い、おたより帳、クラスだより等でも保護者との相互理解を図るよう努めている。

特に、平日、わが子と一緒に過ごす時間が物理的に少ない保護者にとって、自分の知らない所で子どもの姿を他者から聞くことほど嬉しい瞬間はないと思われる。現場の職員の方も、このように多様な環境下で過ごされている保護者の方々と、限られた時間の中で良質なコミュニケーションを取ることの重要性を感じている方が多いと思われる。保護者と職員がともに子育てをする協力者であることが子どもを育む上で大切で、そのため、普段からコミュニケーションを取り保護者とのより良い関係を築くことが重要となってくる。日々の業務をこなしながら限られた時間で、どのようにすれば良いのか、保護者とのコミュニケーションが更に深まっていくように様々な取組をされていくことを期待したい。

7 事業評価の結果（詳細）と講評

共通項目の評価対象Ⅰ福祉サービスの基本方針と組織及び評価対象Ⅱ組織の運営管理、Ⅲ適切な福祉サービスの実施（別添1）並びに内容評価項目の評価対象A（別添2）

8 利用者調査の結果

アンケート方式の場合（別添3-1）

9 第三者評価結果に対する福祉サービス事業者のコメント

（令和元年 11月 18日記載）

今回、第三者評価を受審するにあたりマニュアル、指針等に基づき現状の保育実践を振り返ると共に、一堂に再度の認識を深めるため準備し、あらためて確認を行ってきた。

評価結果から普段の保育では気づきにくい部分に違った視点から意見がなされ、特に自己評価では課題を解決するのに貴重な機会ともなった。

なかじょう保育園では、小規模園での特徴を活かしつつ、一人ひとりの子ども達の成長に寄り添い見守りながら、保護者や地域からの理解、信頼に繋げるよう、将来に向け保育の向上に努める。